

教務だより

2013年12月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

奇跡は必ず起こる!!—「遅刻大魔王」の大逆転

茗溪塾塾長 宇野 雅春

いよいよ受験も本番に近づいています。中学受験の一部や大学受験の推薦ではちらほらと合格の情報も入ってきています。不安で気持ちが揺らぐときかもしれません。着実な学習を進めている人もいれば、ゲーム、CD、コミック、テレビ、メールのやりとりの度がすぎて勉強のペースを崩している人もいます。まわりのいろいろな雑音と戦いながら、学習を続行させていくのは確かに大変なことですが、それが軌道に乗ると逆に喜びが生まれてきます。

「テストの翌日から学校が終わるとすぐに塾に来て、過去問をやり始めた。やれるだけやって結構たいへんだったけれど、とても楽しかった。自分がやった分だけ、成績が上がる。とても充実感があった」

S君の合格体験記の一節です。合格体験記のなかで「岐路」という言葉を初めて使った生徒で、かれこれ六、七年も前の文章なのですが印象に残っています。受験が「人生の岐路」というのは一面で大げさかもしれませんが、後で振り返ってみれば、誰にとっても大きな岐路なのです。大学受験にいたってはもっと大きな分岐点に見えます。

最終盤、受験勉強にのめり込み始めたS君。実は、彼は塾でも学校でも生え抜きの「遅刻魔」。

「おい、Sはどうした?」「心配ないよ、三十分後には来るから」

そのS君は合格体験記で、次のように続けています。

「自分は今、成長している。そう…、今、高校受験という『岐路』に立っている。そんな気がした」

勉強への集中力が出てくることで、自分やまわりがもっと見えてくることがあります。S君は、自分のレベルに敏感になっていきます。

「そして、またたく間に二月からの試験がはじまった。そのとき僕は、急速に実力をつけていったため一日ごとに、数時間ごとに波があった。そしてそのことを自覚していた」

ついこの間まで、遅刻は当たり前、宿題もやってきたことがなく、担任のK先生からゲーム機を取り上げられそうになって、そのときだけはテストを頑張り抜いて取り上げを免れたりしていたS君とは、まるで違うS君がそこにはいます。

「すべての試験が終わった。自分では今までの試験のなかで最高の出来だった。やれるだけはやった。やり尽くした。試験が終わったとき、今までの疲れと緊張感が一気にとれた。結果がすごく楽しみだった。落ちていても受かっていても笑って門を出ようと決めていた」

この受験があった数日後、S君はまだ受験の終わっていない生徒の校門激励に先生たちと一緒に参加してくれました。帰りの電車ですっと一緒だったのを今でも覚えています。悔いなく受験を終えられたこと等を熱心に話してくれました。一つ大人になったS君を感じました。

「合格発表を見に行った。不安でいっぱい気持ちで門をくぐった。そして、天使と悪魔、どちらにも変わる白い数字の書かれた表を見た。それはまぎれもなく天使だった。自分の目を疑った。何度も何度も目が受験票と掲示板を往復した。けれども、やはりそこには自分の数字があった」

そしてS君は、合格体験記の最後を次のように締めくくっています。

「そのときの気持ちは書き表せないものなので書かないでおくが、自分が何年もかけて努力したことがかなう喜び、うれしさはすごいものだ」

受験は生徒一人一人にとってそれぞれ違う体験です。どんな受験がいいのかということも人それぞれの価値観で違うと思います。ただ、今この時期でいえることはあれこれの迷いを捨てて、目標へ向けて努力を続けようということです。結果はあとでついてくるもの。今は心を決めて進むとき、そう考えます。

(塾長著書「合格への道しるべ」より)